

エリック・カールのコラージュ

—絵本における造形的特質—

鉢呂光恵

藤女子大学 人間生活学部 保育学科

1. はじめに

絵本作家のエリック・カールは代表『はらぺこあおむし』の絵本によって世界中に知られている絵本作家である

1929年、アメリカのニューヨーク州に生まれた。両親はドイツ系ユダヤ人。1935年6歳の小学校入学の年、両親の故郷ドイツに渡る。自分を思いっきり表現できる自由なアメリカの小学校とは違い、厳しい規則と堅苦しい学習の毎日に戸惑いすっかり学校嫌いになってしまう。この幼き日の苦い体験が彼の絵本制作における原点のひとつにもなっている。

大学卒業後、グラフィック・デザイナーとして働くようになるが、児童教育書の挿絵の仕事がきっかけとなり絵本制作に取り組むことになる。1968年、38歳のとき『1・2・3・動物園へ』ではじめての絵本を出版し、ポローニア国際児童書展グラフィック大賞受賞。1971年、『Do You Want To Be My Friend?』でポローニア国際児童書展絵本大賞受賞。特に1969年、『はらぺこあおむし』の大ヒットは世界的な絵本作家としてその名をゆるぎないものにしていく。

彼の絵本の造形的特徴は、コラージュ技法による表現である。コラージュとは「糊付けする」の意であり、新聞、布片、針金、色紙など絵具以外のものをさまざまに組み合わせて画面に貼り付け、特殊な効果を狙った絵画の一技法である

ここではいくつかの作品におけるコラージュ技法の表現を通して、造形的な視点からその特徴を述べていきたい。また彼の子どもたちに対するメッセージなども私見ではあるが簡単にふれてみる。

《コラージュの歴史》

コラージュは二十世紀初頭、ピカソやブラックが創始した「キュビスム Cubisme 立体派」の技法の一つである。「パピエ・コレ papier colle (貼り絵)」と呼ばれたその技法は「コラージュ collage (仏)」に発展し、「ダダ dadaism (仏)」や「シュルレアリスム surrealisme (仏) 超現実主義」などの芸術運動を誕生させた。「キュビスム」の絵画の本質を問い直す試みの中で(図1)、画面上に、絵具だけでなく新聞紙などのオブジェを貼り付ける「パピエ・コレ」が発明された。表現の直接性が特徴である(図2)。反芸術運動「ダダ」は写真によるコラージュ、「フォト・モンタージュ Photomontage (英、仏) 合成写真」を発明した(図3)。異なる二つの写真を合成することによって意外性とユーモアに満ちた異風景が出現する。無意識の世界を探る技法として知られており、現在では心理療法のひとつとしても使われている。「シュルレアリスム」のコラージュは、異質なものの同士の意外性のある貼り付けから思



図1. パブロ・ピカソ
「アンプロワール・ヴォ
ワールの肖像」1910年

いがけない世界のイメージを掘り起こす技法である。特に、異様な美や、ユーモアやロマネスクの領域を絵画に導入した(図4)。その後、コラージュは表現の奥行きを広げることのできる便利な技法

として多くの表現者たちに伝わった。特に映像現場やデザイン界では積極的に受け継がれており、編集時の活用は制作にあたっての必須となっている。現在も風変わりなイメージを作り出す技法として広く使用されている。

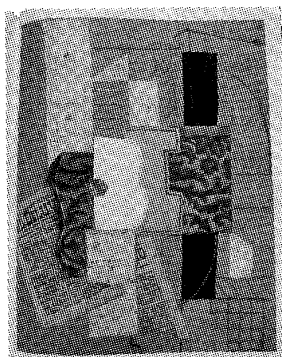


図2. パブロ・ピカソ
「ギター」1913年



図3. Hanna Hoch
1931年



図4. マックス・エルンスト
「百頭女」より

2. コラージュのための色紙

人間の色彩感覚は風土によって育まれていく。天性の色彩感覚を持ちあわせたエリックは幼少の頃アメリカで明るい鮮やかな色に目を奪われたが、その後ドイツ独特の自然が発する色調の魅力を発見していく。彼が市販の色紙に満足せずに薄い紙の上にアクリル絵具を塗って自分自身のコラージュのための色の研究をはじめるのは必然であった。この自分の色紙作りの発明が彼の絵本における大成功の第一歩となる。

2.1. アクリル絵具の特性を生かす

エリック・カールの絵本はアクリル絵具を使用した色紙によって制作されている。アクリル絵具は色鮮やかな顔料（色の元になる素材）を透明なアクリル樹脂で練り上げた絵具である。彼の色紙はアクリル絵具の特性を最大限に生かしている。

- ① エリック・カールの色紙は、水彩画風、不透明水彩風、ポスターカラー風、パステル画風、油絵風の力強いタッチなど、様々な表現を駆使している。（アクリル絵具は水溶性である。水彩絵具のように水に溶け、乾くと耐水性になる。したがって混ぜる水の量によって、色紙の描写に変化にとんだ表情をつけることが出来る）。
- ② エリック・カールの色紙は、多くの色を重ねているが濁ることなく色鮮やかである。（アクリル絵具は鮮明な発色が特徴である。変色や退色も起こしにくい。画面に塗るとすばやく乾き、耐水性になるので上から塗っても色が濁らない。アクリル絵具は安全で取り扱いが簡単なので、この利便性により世界中で広く使われている）。

①及び②は他の画材にはない特性であるが、彼はこの特性を生かし独特の絵本の世界を創っているといえる。この他、アクリル絵具には耐久性がある。暑さや寒さ、太陽光線にも強い。また乾燥後は絵具の中のアクリル樹脂が強靱な塗膜を作り、湿気や乾燥から顔料を守ってくれる（単に画材としての発色の良さはポスターカラーが優れており、重ね塗りの重厚性も油絵の発する深みのある表現とは異なっている）。エリック・カールがアクリル絵具を使用したのは、このような堅牢性や扱いの良さから来る表現の多様性を最も重要視したのであろう。この多様性を生かした彼の創造は、色紙の制作

時においていっそう発揮されることになる。彼は、アトリエの引き出しに数え切れないほど多くの色紙を保持し、随時使用している。「どんなに小さな切れ端も捨てられない」という彼の制作を支えているのである。

2.2. 色紙の色彩を創造する。

エリック・カールの色紙制作は、薄紙に色を塗ることから始まる。

白い薄紙にマット・メディウム（補助画材）で下塗りをして、絵具が裏側にしみないようにする。それから太い筆を使ってリズムカルな大きなストローク（筆づかい）で着色していく。単色であっても絵具の厚みの差によって色の濃さに変化が見られ、さらにかすりやにじみに等による変化も加わって、ラフな作業の中にも多彩な表現力が発揮される。色紙自体が作品となっているともいえる。

NHK『未来への教室』での色紙制作にあたっては、子どもたちに「はみ出してもいいから、思いっきり大きく腕を振って描くこと」を指示している。余計な心配（はみ出さないか、失敗しないか）は無用であること。ただ心のままに思いっきり色を塗ることによって得られる開放感が「もっと美しく色を塗ること」につながっていくと感じ取らせようとしていた。誰もが出来る簡単な色塗りではあるが指先だけで小さく塗るのではなく、体全体を使うことによって全身の大きな動きが筆に伝わっていく。色彩はより鮮やかに子どもたちの中に定着されていく。古来、画家たちは自分のイメージの定着を色の塗り方や筆の使い方によってコントロールしてきたことを体感させていこうとしているように見える。

また「失敗したっていいんだよ。ほらこうすればもっと良くなる」と制作の可能性を投げかけている。失敗だと思った作品の中に新しい創造につながっていくヒントがあると教えている。制作の自由の保障によって緊張感をとかれた子どもたちは、生き生きとして色紙制作に取り掛かっていくようになっていった。エリック・カールの造形観が子どもたちの制作のなかに実現されていった。

2.3. 色紙の質感表現を表現する。

エリック・カールは色紙の色彩表現とともに質感の表現も重視する。

着色された色の上にさらに別な色を何色か加えて微妙な模様を作り出していくのが彼の色紙の特徴である。紙の上にちょんちょんと色を手早く載せていく。絵具がぬれている間に、筆のおしりの部分や、使い古しの歯ブラシ、カーペットの切れ端などを使用し、それらのものを叩いたり引っかいたり、すばやく動かしたりして表面にさまざまなタッチの変化をつけていく。この微妙なテクスチャー（表面の素材感）の変化による質感描写の発見によって樹木、大地、生き物など、自然の諸相を的確に捉えていくことが可能になった。

彼の色紙の模様は、樹木や大地、生き物などの、質感や諸相を特定して再現するために表現するものではない。特定の物質の質感を再現するために古典的な絵画のように技術を駆使するのではなく、偶然性を利用した自由な制作によって自然の諸相を連想させるものになっている。再現ではなく連想によるという色紙制作の自由性が彼の多彩なコラージュをいっそう創造的なものにする要因になっている。彼の自然を捉える豊かな感覚も型にはまらない自由な表現によって一層強く引き出されているといえる。樹皮や花の色の変化など、自然の発するグラデーションの推移を色紙は見事に対応している。

NHK『未来への教室』でエリック・カールは子どもたちに素材感（質感）の観察を指導している。子どもたちに自然の中にあるさまざまなものを改めて詳しく見つめるといった基本を重視させる。子どもたちはマジック・フレーム（エリック・カールが考案した画枠）を通して物を注意深く見ること

で、ふだんは気がつかなかった石の表面や羊歯の群れの模様が、エリックの制作した色紙の模様に見える事を発見していく。子どもたちは自己の内面と自然との対比からより多様な発想を生みだしていった。

3. エリック・カールのコラージュ

コラージュ制作は比較的簡単にイメージを表現できる。コラージュの貼り付けはきわめて直接的である。イメージを表現するための技能が必要とされる絵画に比べると作品の制作が容易である。制作者のアイデアや発想が直接作品として生かされる技法である。

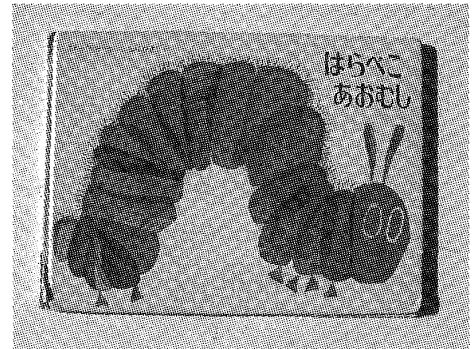
エリック・カールの絵本では「自分で作った色紙」を使ったコラージュ技法が特色である。自分で作った色紙をコラージュの「色彩表現」、「形態表現」、「画面構成」において使用し、グラフィック・デザイナーとしての造形感覚を遺憾なく発揮していく。グラフィック・デザイナーとしての造形感覚が生かされる所以である。

3.1. コラージュの色彩表現

3.1.1. 補色関係の多用

補色とは色相12色環上で向かい合っている色同士であり、最も目立つ配色のことを指す。(例；赤－青緑、橙－緑青、黄橙－青、黄色－青紫、黄緑－紫、緑－赤紫) エリック・カールのコラージュにおいてはこの補色関係が効果的に使用されている。

『はらぺこあおむし』の表表紙では、あおむしが大きくコラージュされている。表紙は絵本の顔であり、絵本のイメージを端的に表現するとともに、読者の絵本への期待感を高めるものである。あおむしの体全体を青緑系の楕円状のつながりでコラージュし、顔の部分には赤を使用している。顔の中の目は補色の緑を使用している。赤の使用面積は、あおむしの体全体を占める青緑に対して五分の一ほどであるが、補色としての効果は見事である。補色を生かすには使用面積が重要な意味を持つ。例は、青緑に対して補色の赤をワンポイントとして使うことで視覚効果を出しながら個性的でユーモラスなあおむしを生み出している(図5)。



〈図5〉「はらぺこあおむし」

裏表紙でも同様である。緑の大きな葉の上であって青緑のあおむしはさほど目立ちはしないが、顔の部分の赤によってちっぽけながらも存在が主張されている。緑の大きな葉との補色関係を生かして、おひさまは橙色で表現されている。橙色は青緑に対して赤より弱い補色的位置にある。緑の葉の上にいる主役のあおむしを生かしながら、おひさまの存在も示すことの出来る色である。ミシュル・パストゥローはその著書『ヨーロッパの色彩』のなかで、「多くの物理学者、化学者は記録された色彩もなお色と考えるのだが、大多数の哲学者、人類学者は記録された色彩は色ではなく、光だと考える」と述べている。エリック・カールはおひさまを光とらえるとともに、暖かさを感じさせる橙色を配してあおむしの成長を促進する自然の大

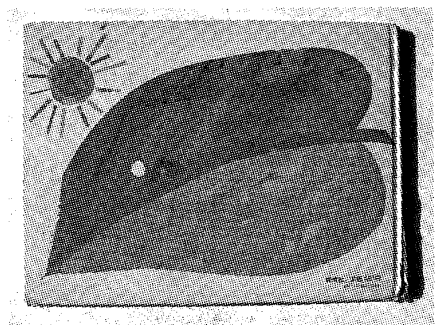


図6 はらぺこあおむし

きさを暗示しているかのようでもある（図6）。

3.1.2. 明暗の対比の利用

エリック・カールのコラージュは白いケント紙上で最もよく映えるが、絵本全体の場面割り（視覚的バランス）も考慮して、自然の背景の上におかれたコラージュも制作している。この制作時には明度の差を利用して背景の中に対象物が埋没してしまわないように工夫されている。図7は『ごきげんななめのとんとうむし』の中で、てんとうむしにけんかを売られる動物たちの一部ある。（生き物たちの大きさに合わせて背景の頁の面積を順に大きく配していく。エリック・カールの巧みな画面構成である）。ここでは色彩の明暗による効果を利用して、自然の背景の上にあっても、はっきりと生き物たちの存在を示す工夫がされている。明るい背景の上には暗い色で生き物が描かれ、暗い背景のもとでは生き物に明るい色を配している。



〈図7〉「ごきげんななめのとんとうむし」

3.2. 形態表現としてのコラージュ

3.2.1. 明確な線と色

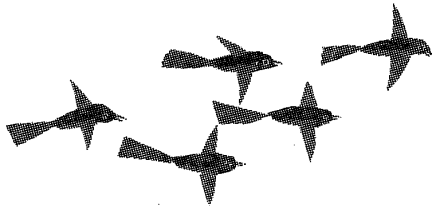
コラージュの最大の特徴は切り取られた画線の鋭さにある。筆で描かれた線とまったく異なり、はっきりとした輪郭が得られる。鮮明な色彩とあいまって明快な線が画面に動きとリズムを生み出している。また絵の中に陰影がついていない。陰影ではなく、生き物の動きや形態の特徴によって区切られて表現されている各部分を（例えばあおむしのお腹の蛇腹等）、同じ色紙を使用しながらも、色のかすれや模様の違い、はさみで切り取られた形の違いなどを生かして対象を際立たせて、イメージ豊かにコラージュしている（図5）。

3.2.2. 動きのあるデッサンと画面構成力

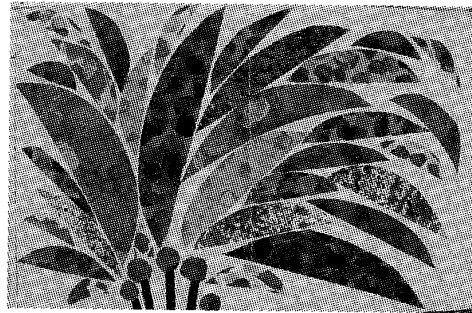
エリック・カールは子どもの頃から、父親と一緒に近くの森に出かけては生き物の観察をしていたという。こういった体験から彼の卓越した観察力は生き物の動きを豊かにとらえていく。子供向けに可愛らしくというのではなく自然界から彼自身が感じ取ったものを最大限に表現しようとしている。例えば野生の動物の描写をとってもあるものは攻撃的であり、愛しさであり、美しさであったりなどと、これらを画面構成の工夫によって生み出している（図7）。

また、彼のコラージュ法による構成は、切り取られた色紙の微妙な形の移動と色の明暗のグラデーションによる視覚的变化を生かしている。生き物の独特の動きやスピード感、また空間の奥行きを表現しているのである。例えば1987年『ことりをすきになった山』における鳥たちの飛行は上昇と下降の自在な動きを滑らかに感じさせるコラージュとなっている（図8）。

1973年刊『うたがみえるきこえるよ』では、同様の方法で見開きのページ全体に音響の世界の広がりを鮮やかに暗示したコラージュが展開されている。音は普通、耳で聞くものであるが、ここでは目で見る音楽、音が反響していくイメージを色と画面構成によってダイナミックに表現している(図9)。



〈図8〉「こつりをすきになつたやま」



〈図9〉「うたがみえるよ、きこえるよ」

3.3. コラージュの特質 絵本全体としての画面構成(場面割)

エリック・カールはコラージュの完成度だけでなく、絵本としての完成度を重視する。彼は絵本を構成する大きな流れを見極めながら、小さな流れのリズムとの統合を重ねていく。動的な部分と静的な部分、明と暗の割合、画面の白とコラージュの部分(天と地)との対比と変化の妙等、単純な展開ばかりが続くことのないように構成を重ねていく。

4. エリック・カールの絵本の特質としかけ

彼は言葉ではなく造形によって、物体の大小や、数の概念を視覚化する。自然の豊かさに気づくしかけも工夫されている。子どもにもわかるような、シンプルな画面構成によって視覚化していく

『ごきげんなめのでんとうむし』では、てんとうむしと他の生き物の大きさによる比較を展開している。頁ごとに生き物と用紙のサイズが少しずつ大きくなっていく。子どもたちは生物の種類による大きさの違いを、頁をめくりながら実感していくことができるのである。特に最後に登場する鯨は何ページにも渡って長い体長が描かれている。楽しいしかけで遊ばせながら巨大な鯨の大きさを実感させていく。この本では、太陽の1日の軌跡を天空の高さによって視覚化し、傍らに描いた時計の針とともに、生き物を取り巻く宇宙の成り立ちをも学ばせようとしている。

『はらぺこあおむし』のしかけは、数である。1つ、2つ、3つと、頁をめくるたびに数が多くなっていくしかけが施されている。また食物の中央には穴があいている。ここには指で触って通り抜ける遊びの楽しさのほかに、時間の観念を味あわせている。

『さびしがりやのほたる』の光るしかけ、『だんまりこうろぎ』の虫の音を聞くしかけ、『くもさんおへんじどうしたの』のくもの糸に触れるしかけ等では、遊びながら自然の恵みの豊かさに気づく工夫がされている。

『こんにちはあかぎつね』では、科学の色の理論を視覚化していく。見開き左頁の青緑のきつねを見つめてゆっくり10まで数えてから、視線を右側の白い頁に移して、今度は3つ数えるとかすかに赤い色が見えてくる。詩人ゲーテが発見した補色による残像効果である。黄色なら青紫というように反対色がぼうっと光のように現れてくる。色彩の理論を体験しながら絵本の楽しさに浸っていくしかけである。

5. コラージュ絵本の改訂

『はらぺこあおむし』の1994年発行の25周年記念版(原書)はリトグラフ(版画の一種)で刷られている。エリック・カールは記念版のあとがき(別付け)において「私のコラージュを中心にした作品がリトグラフという方法でうまく再現できるかどうか少し不安でした。しかし、仕上がってきたものは20数色も使っていて本当に美しく再現されており、驚くと同時に、喜ばしく思います。このリトグラフは私のコラージュ作品を見事に表現しています。皆さんも私と同様にこのリトグラフを楽しんでいただけることと思います」と述べている。

この1994年の改訂版は、1969年発行の原書とは異なる造形感覚によって作られた絵本であることに驚いた。ここには印刷色の発行年代による変化とは違った決定的な変化があった。このことから、今まで刊行された『はらぺこあおむし』の比較検討を行った(日本では、偕成社から、初版1976年、1988年愛蔵ミニ判、1989年改訂新版、1994年ビッグブックの計4回発行されている)。今回比較検討したのは、①1969年 The World Publishing Company 社版(原書)、②1976年 偕成社版、③1989年偕成社改訂新版、④1994年 PHILOMEL BOOKS 社二十五週年記念版の計4冊である。

エリック・カールは1985年に初期の絵本『はらぺこあおむし』の絵を全て描き直していた。1989年偕成社改訂新版の表紙カバーの裏には、エリック・カールの写真と簡単な経歴の下に、小さくこう記されている。「カール氏は、自分の作品に、責任感と愛着を持っています。'85年には、初期の絵本『はらぺこあおむし』の絵を全て描き直しました。この本は、その新しい原画をもとに作り直した改訂新版です」。

改訂の理由については触れられていないが、1989年の偕成社改訂新版は、1969年原書版とはかなり異なった作風を生み出している。コラージュ画は平面性を増し、明るく派手な色彩が映える光沢のある紙が使用されている。しかけの丸い穴のサイズも少し大きくなっている。野性的なあおむしは都会生まれの可愛らしいあおむしに変貌している。色彩も自然の発する深い色から、テレビの液晶画面のもつ鮮やかな発色へと変化している。本の最後、クライマックスとなる蝶への変身の頁は、改訂版の特徴が最もよく表れている。改訂版は子どもの目をひきつける色鮮やかで華麗な蝶がコラージュされているが、原書版のもつ素朴な美はもはや見られない、などなど。時代の流れによる色彩環境の変化と人々の美意識の変容をとらえて表現していこうとしているのではないか。まさに『はらぺこあおむし』の変貌を見ているようである。

6. 考察

エリック・カールは自分で作った色紙によるコラージュ技法で、シンプルでありながらインパクトのある描画スタイルを確立した。アトリエの棚にある色紙を切り貼りして、試行錯誤をくりかえしながら、豊かな色彩感覚と独特のフォルム(形態)で制作された作品が生まれている。それらは、一目見ただけでエリック・カールの作品と判明する特徴を備えている。明快で派手な配色というだけではなく、自然の発する豊かな色彩が絶妙なバランスをとってコラージュされている。彼は対象の再現ではなく対象を連想させる色紙の質感描写の特質を最大限に生かして創造の世界を広げている。

彼は地球上の生き物と、生き物の命を育む自然環境を描写していく。生き物は愛情をもって描かれてはいるが個としての生命感や野生の非情さ、鋭さを秘めており、自然の美は刻々と変化する臨場感をもって描かれている。子どもたちは彼の絵本を読むことで自然における生き物のかかわりに気づいていくだろう。絵本としての完成度の高い美が自然のシステムの再認識を促しているようでもある。

しかし、NHK『未来への教室』では、エリック・カールが「紙の上に鉛筆で下書きをしていくこと」

に違和感を覚えた。なぜコラージュに下書きが必要なのが不明だった。コラージュは思いがけない世界のイメージを簡単に作り出すことの出来る技法ではあるが、そこに制作者の創造性が問われてもいる。コラージュの創造性とは、組合せの妙から発する意外性のある風景の出現であり、完成に向かう予測できない飛躍にある。コラージュの概念は時代とともに変化していくが、完成が想定されるこういったエリック・カールの制作とコラージュをどう結びつけていったらよいのであろうか。エリック・カールのコラージュとは絵本制作のための手段としてのコラージュであるとおさえおけばよいのであろうか。完成度の高い作画ではあるが、コラージュというよりはパピエ・コレ（貼り絵）の意味合いが強い技法である。絵本における、コラージュという技法の限界を感じさせられた。しかしこれはエリック・カールの絵本作家としての数々の業績を損なうものではない。

参考文献

- 1) 美術出版社：『みずゑ』（2002、春）
- 2) 美術出版社：『リキテックス 自由自在』（1997）
- 3) Eric・Carle：『The Art Of Eric・Carle』PHILOMEL BOOKS（1996）
- 4) H・W・ジャンソン、アンソニー・ジャンソン共著、木村重信、藤田治彦共訳：『西洋美術の歴史』創元社（2001）
- 5) 白泉社：『Moe』（2000、4）
- 6) 柏木博：『色彩のヒント』平凡社新書（2000）
- 7) マックス・エルンスト著、巖谷國士訳：『絵画の彼岸』河出書房新社（1975）
- 8) 汐夕社：『NHK 未来への教室 世界の達人からのメッセージ3、エリック・カール 色の魔法を学ぶ』（2003）
- 9) 新潮社：『新潮世界美術辞典』（1985）